



昨年から販売を始めた県育成品種「紅鶴」の前で、今年も家族そろってリンゴの旬を迎える木内修一さん(左から3人目) 家族【左から】妻・淳子さん、父・真之助さん、修一さん、長男・雷斗さん、孫・碧之助ちゃん(10カ月)、長男嫁・志穂さん、孫・紅爾ちゃん(2歳)

## 親子3代 受け継ぐ思いを未来へ紡ぐ

### 真田りんご園 - 中発知町 -

池田地区の玉原山麓りんご団地で、3代続く木内修一さんが営む真田りんご園は、栽培を始めて約40年。おいしいリンゴを作ろうと、作付け面積を広げさまざまな品種栽培を手掛けてきた地道な努力の中には、どんなときも支え合う家族の絆がありました。

3鈔の栽培面積に、「ぐんま名月」や「おぜの紅」など県育成品種を中心に約50品種を栽培し、年間収穫量は約50ト。木内さんは「リンゴ一筋に走り続けてきた。支えてくれる家族に感謝」と話します。

もともと農家で、父・真之助さんがコンニャクや米を栽培。国の転作事業や関越自動車道の開通に伴い、約40年前からリンゴを栽培し、販売を始めるようになりました。同時期には観光農園が増え、この地域に22軒のりんご団地が生まれました。

木内さんは結婚を機に、24歳で地元に戻り就農。当時は栽培知識が乏しく、サラリーマン時代とは環境や収入も異なる上、辛抱の毎日でした。

子どもが生まれ家族を支えるためにも、向上心を持つて学び続ける日々。地域の組合で最年少だった修一さんは、素直な性格が気に掛けられ、丁寧に教えてもらったといいます。徐々に栽培の楽しさに分かってくるようになり、事業が軌道に乗ったときには、栽培面積が当初の3倍に増えていきました。

35歳で園主となり、現在は真之助さんと妻・淳子さん、長男夫婦の雷斗さんと志穂さんの家族5人で管理に当たります。今年は、4月下旬の凍霜害で、本来実らせたい花が咲かないなど悩まされましたが、良い果実を見極めて順調に育ったといいます。それぞれ家族にも事情があり、修一



【写真上】開園案内のはがきに、毎年恒例の家族写真を送る。写真は2006年【写真下】親子3代で収穫に当たる。「良いのができた」と実りに感謝